

中学校におけるキャリア・カウンセリングの在り方 スクールカウンセラーとの連携を生かして

山口市立鴻南中学校 教諭 福永 由希子

1 研究の意図

フリーターやニートの増加が社会問題化する中、学校には、児童生徒が時代の変化に力強くかつ柔軟に対応していく、幅広い能力の育成を支援するキャリア教育が求められてきた。

本県においても「キャリア教育の推進について」（山口県教委、2005）の中で、キャリア教育を進学、就職といった狭い意味でとらえるのではなく、働くことで自分が何を実現したいのか、社会の中でどのように生きていくのかという大きな視点でとらえる「生きる力」の育成について述べられている。（図1）

各学校には、積極的な進路指導をキャリア教育の中核に位置付け、生徒一人ひとりのキャリア発達を側面から支える職場体験学習等の体験活動の推進・充実、さらには、きめ細かな指導・援助としてのキャリア・カウンセリングの充実等、教育活動全体の見直しが強くとらえられている（図2）。このキャリア・カウンセリングは、出口指導を中心とした相談活動を指すものではなく、「入学時から始まり、進路の選択・決定、その後の適応に至るまでを支援する、プロセスを重視した相談」（注1）を指している。

筆者は、これまで教育相談担当をしながら、スクールカウンセラー（以下SC）が、不登校生徒の抱える問題を的確にとらえ、なおかつ、一人ひとりの個性や発達段階に応じて「プロセス」を重視し、自己を見つめさせながらカウンセリングを重ね、卒業に導いた事例を見てきた。一方で、SCの専門性を生かしたカウンセリングを、不登校でない多くの生徒にも活用することはできないだろうかという意識をもち始めた。そして、不登校生徒だけでなく、すべての生徒の自己教育力を高め、生徒のキャリア発達にかかわる諸能力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力）を円滑に高めるための一つの試みとして、SCと連携した授業の実践が有効ではないかと考えた。

そこで、本研究では、キャリア教育におけるキャリア・カウンセリングの在り方を考えるとともに、教員とSCが連携し、カウンセリングの一部を導入した授業の実践を通して、キャリア・カウンセリングの更なる充実を図るための方途を探っていくこととした。

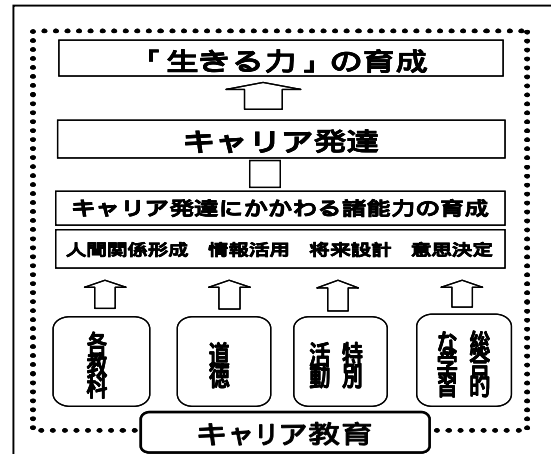


図1 キャリア教育と生きる力

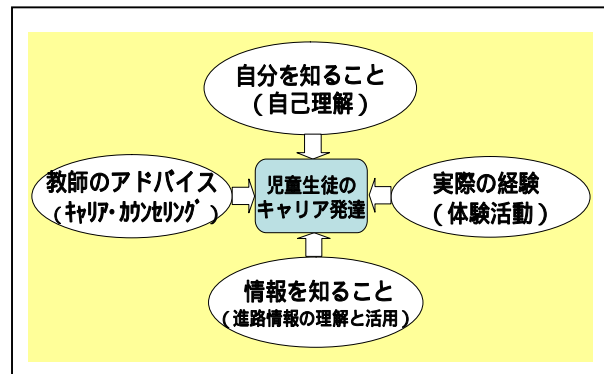


図2 キャリア教育指導上の4つのポイント

「キャリア教育の推進について」（山口県教委、2005）の図を一部修正

2 研究の内容

(1) キャリア・カウンセリングの現状と在り方

ア キャリア・カウンセリングの現状

平成 16 年に文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(以下「報告書」)において「従来、進路指導を中心とする学校教育の取組において、発達課題の達成を支援する系統的な指導・援助といった意識や観点が希薄であったり、実践を通じた指導方法の蓄積が少なかったりしたことなどから、取組が全体として脈絡や関連性に乏しく、多様な活動の寄せ集

めになってしまいがちとなり、生徒の内面の変容や能力・態度の向上等に十分結びついていないくらいがあった」(注²)と報告されている。また、キャリア・カウンセリング等の機会を指導計画に明確に位置付け、個別の指導・援助を充実させる必要性も記されている。さらに、「報告書」の資料の中では、卒業生が中学校の進路指導で最も指導してほしかったこととして「自分の個性や適性を考える学習」があげられている(図3)。これらのことから、具体的な進路選択の方法や情報の入手といった、いわゆる進路に関する実用的な方法よりも、自分の個性や適性を考えること、つまり「自己理解」を深める必要があったことがうかがえる。

本県では、平成 17 年 3 月にキャリア教育の推進が提唱されている。筆者が行った本県のキャリア教育推進校での聞き取り調査では、定期教育相談におけるキャリア・カウンセリングの実施や、職場体験学習に関連したキャリア・カウンセリングがそれぞれの学校で行われており、県下の各学校現場や教員一人ひとりの関心、課題意識は高まりつつあるように思われる(表1)。これらの学校の取組みを参考に、キャリア・カウンセリングをどのような場面で活用できるかについて検討するとともに、場面を系統立てて整理していくこととした。

イ キャリア・カウンセリングの在り方

(ア) キャリア教育におけるキャリア・カウンセリング

キャリア教育は、本来的な進路指導、職業教育を中核に位置付け、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を中心に、各教科との関連を図りながら、生徒一人ひとりのキャリア発

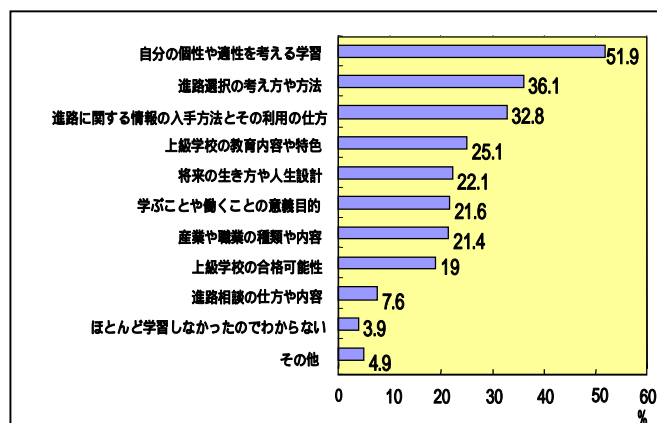


図3 中学校在学時に指導してほしいこと(注³)

表1 キャリア教育推進校の取組み

A校	・職場体験学習の事前・事後のグループ、個別でのカウンセリングの実施 ・進路に関する内容を含む定期教育相談の実施
B校	・キャリア・カウンセリングを取り入れた定期教育相談 ・教員のキャリア・カウンセリングの技量を高めるための研修の実施
C校	・キャリア教育の視点に立った授業の実施 ・教員のキャリア・カウンセリングの技量を高めるための研修の実施
D校	・生徒の変容をとらえる評価の在り方、評価の見直しの実施 ・進路に関する内容を含む定期教育相談の実施 ・学年単位でとらえるのではなく、中学校3年間を見通した計画的、系統的なキャリア・カウンセリングの実施

達を促す取り組みである（図4）。

「報告書」では、キャリア教育を進める上では、どのような能力（表2）や態度が身に付いたかという観点から、生徒一人ひとりの状況を的確にとらえるとともに、カウンセリング機会の確保と質の向上に努めることが大切であるとされており、キャリア・カウンセリングは、キャリア教育の活動の中で欠かせないものである。

さらに、キャリア・カウンセリングは、キャリア発達にかかわる諸能力の発達の過程が生徒一人ひとりに多様であることを意識して行われる必要がある。

(イ) キャリア・カウンセリングの定義

キャリア・カウンセリングには、様々な定義があるが、「報告書」では、学校におけるキャリア・カウンセリングを次のように定義している。

子どもたち一人一人の生き方や進路、教科・科目等の選択に関する悩みや迷いなどを受け止め、自己の可能性や適性についての自覚を深めさせたり、適切な情報を提供したりしながら、子どもたちが自らの意志と責任で進路を選択することができるようにするための、個別またはグループ別に行う指導援助である^(注5)

学校におけるキャリア・カウンセリングは、生徒のキャリア発達を支援するものであることから、第3学年に行う進路相談だけではなく、入学時から進路の選択・決定、適応に至るまでを援助していくものである。そして、生徒が自問自答を繰り返し、自らの生き方を見つめていく中で自己理解をしていく「プロセス」を重視して、将来の選択のために自発的に行動できるように援助していくものでなければならない。

(ウ) キャリア・カウンセリングにおけるプロセスの重視

キャリア・カウンセリングは、「プロセス」を重視した相談である。「プロセス」とは、生徒が自己を見つめ、「どこに行くのか（夢・希望）」、「今どこにいるのか（現状理解）」、「どうするのか（行動）」と自問自答できるようになるまでの過程を意味している。このプロセスの中で、教員が適切な「考えさせる問い」を発し、生徒に自らの意志と責任で進路を選択する力を身に付けさせていくことがキャリア・カウンセリングの役割だと考える（図5）。プロセスを重視した相談を行うことで、自己理解が深められ、生徒は自分の将来の生き方についての意思決定が可

「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」、端的には、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」

「キャリア」とは、「個々が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」としてとらえている

図4 キャリア教育の定義「報告書」(2004)^(注4)

表2 キャリア発達にかかわる諸能力(国立教育政策研究所,2002)

人間関係形成能力	自他の理解能力 コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・認識能力 職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力 職業理解能力
意志決定能力	選択能力 課題解決能力

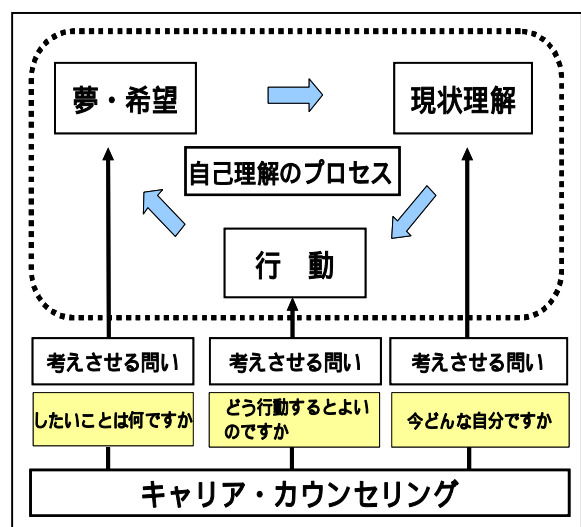


図5 キャリア・カウンセリングにおけるプロセス

能になる。学校教育の中でのキャリア・カウンセリングは、生徒の発達段階に応じた「自己理解」を深めさせる活動が重要である。

(I) キャリア・カウンセリングの場面

「報告書」にもあるように、生徒一人ひとりの状況を的確にとらえてキャリア・カウンセリングの機会を確保するとともに、カウンセリングの質そのものを向上させていくことは、極めて重要である。学校教育の中で、キャリア・カウンセリングを行う場面は様々あり、授業中の何気ない声かけが、絶好の機会となり得ることもある。

では、実際にはどのようにキャリア・カウンセリングの場を確保し、質の高いカウンセリングを行っていけばよいのか、具体的に3つの場面に分けて考えることとした。

a 定期的なキャリア・カウンセリング

キャリア・カウンセリングは、学級や学年で多く実施されている定期相談の中で行われることが多い。年間計画に組み込まれている定期相談は、「進路相談」を兼ねていることが多く、時間の制約もあることから、キャリア・カウンセリングには、継続的・系統的な取組みが難しい場合も多い。しかしながら、「生徒が学校生活に適応し、現在及び将来にわたって生き生きと生活していく」という定期的なキャリア・カウンセリングの本来の目的と照らし合わせて考えると、継続的・系統的に生徒と語り合うことが望ましい。

継続的・系統的な取組みを行う場合、それぞれの発達段階に応じた目的を設定してキャリア・カウンセリングを進めていく必要がある。中学校の場合、第1学年では、新しい環境への適応を援助し、教員や生徒間の人間関係をつくる援助に重点を置き、第2学年では自己理解を深め、職業観・勤労観をつちかひながら3年生への円滑な移行を援助し、第3学年では具体的な進路に焦点を当てた援助を行う等、学年が上がるにつれて進路に焦点を当てた内容になる。学年や個々の発達段階に応じて、相談内容や援助の方法は異なってくるが、相談対象となる生徒が、進路に関して、どのような悩みをもっているかを把握しておくことも必要である。

b 学習活動と連携したキャリア・カウンセリング

キャリア発達を促す視点で、進路学習や道徳、総合的な学習の時間等の授業を見直すことは、キャリア・カウンセリングの機会を増やす意味から重要なことである。それぞれの授業の目標とキャリア発達にかかわる諸能力の育成を関連付けて授業を実践し、生徒に振り返りをさせることで、生徒は、主体的にグループや個別のキャリア・カウンセリングの機会を得ることができるようになる。特に進路学習を中心とした学級活動においては、構成的グループ・エンカウンター等カウンセリングの機能を生かした学級活動を展開しやすく、授業後の個別カウンセリングにつながるケースも増えてくると思われる。こうした機会をとらえ、適切なキャリア・カウンセリングを行うことは、生徒の自己理解を深化させ、学習成果を向上させると考える。

c 体験活動をとらえたキャリア・カウンセリング

日常の学校生活とは大きく違う環境の中で行う職場体験学習は、職業観・勤労観だけでなく自己理解や将来の生き方についての価値観等に大きな影響を与える。そのため、体験活動が一過性の行事とならないように事前・事後指導の充実を図ることが必要である。事前指導では、体験活動の意義を十分に理解させるとともに、生徒自身が何を学びたいのか、何を課題にするのかを発見し、自覚できるようなキャリア・カウンセリングを行わなければならない。事後指導では、まとめの話し合いや討論会、発表会等を計画し、それぞれの機会をとらえ、キャリア・カウンセリングを行うことで、体験活動での自分の考えや態度、実践をその後の生活に生かし

ていくことができる。

「キャリア教育の推進について」(山口県教委、2005)の中にも、「体験学習は『なりたい自己』を広げ、『なれる自己』へつなげる循環のきっかけとなる」(図6)(注6)とあり、ここでいう循環が、キャリア・カウンセリングで重視している「プロセス」であり、自己理解を深化させていく上で最も重要なものである。

(オ) キャリア・カウンセリングにおけるシェアリング(分かち合い)

キャリア・カウンセリングは、基本的には個別のカウンセリングである。しかし、

限られた時間の中では、すべての生徒の不安、悩み、疑問に対応するのは難しいため、多くの生徒に対応する方法として、グループ・カウンセリングを用いることが多い。グループ・カウンセリングにおいては、授業や行事の際にグループワーク等を取り入れ、その活動の中で生まれた不安、悩み、疑問をシェアリングしていく。シェアリングをすることにより、不安が和らぎ、新たな自分を発見したり、新たな行動を可能にしたりすることができる。進路学習で一般的に行っている、感想を互いに伝え合い、気持ちを分かち合うシェアリングを、授業者が意図的に行うことによって、グループ・カウンセリングの機能を十分に果たすことができる。

(2) SCと連携した授業の試み

SCが行う「プロセス」を重視したカウンセリングは、多くの場合、一部の不登校生徒等が対象になっている場合が多い。このSCが行うプロセスを重視した対応を不登校生徒だけでなくすべての生徒を対象にできないかと考え、授業を実践することとした(図7)。

授業では、生徒の自己教育力を高め、さらに生徒のキャリア発達にかかわる諸能力を高めることをねらいとし、グループ・カウンセリングの機能を生かしたシェアリングを試みた。さらに、授業後の教員やSCとの人間関係、あるいは生徒同士の人間関係がより望ましい方向に築かれていくことをめざすとともに、個別のキャリア・カウンセリングの機会が増えることを期待した。

ア 授業実践

原籍校である山口市立鴻南中学校(第1学年の1クラス 32名)で授業(学級活動)を実施した。

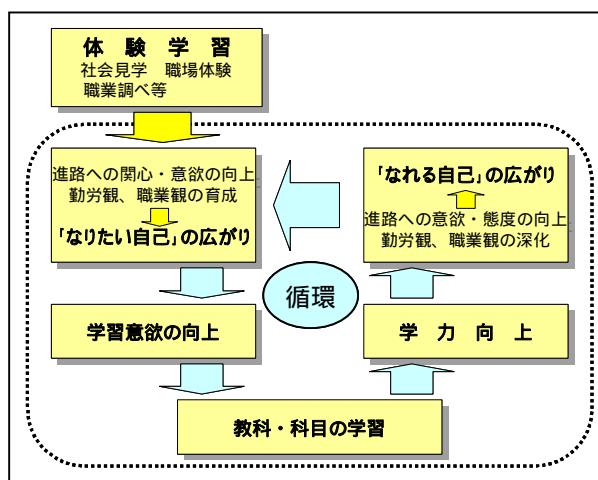


図6 体験学習における循環

「キャリア教育の推進について」(山口県教委、2005)の図を一部修正

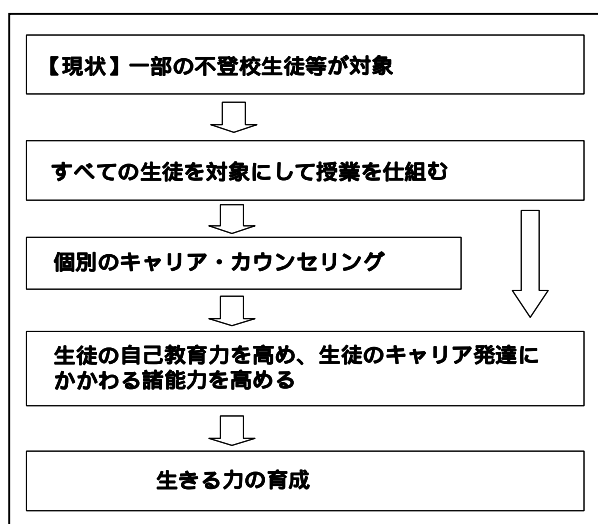


図7 SCとの連携の流れ

学級活動学習指導案

- 1 単元名 「自分を見つめ、特色を知る」
- 2 本時の主眼
 - ・エゴグラムの読み取りを通して自分を知ることにより意欲をもち、個性を伸ばしていこうとする態度を育てる。
 - ・シェアリングを通して、自身の意識化を図るとともに、他者の自己開示を聞くことで自己洞察を深める。
 - ・スクールカウンセラーから専門性の高い助言を得ることで、スクールカウンセラーとのよい関係を育み、今後の相談活動を円滑に行う素地とする。
- 3 学習過程

学習内容・活動	留意点(T1:指導者 T2:スクールカウンセラー)
<p style="text-align: center;">インストラクション</p> <p>1 本時のねらいの確認 前時に記入したエゴグラムを見て、本時のねらいを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T1 スクールカウンセラー（SC）を紹介し、心の専門家として授業に参加することを伝える。 ・T1 回収した質問紙をグラフ化したものを配布する。
<p>エゴグラムを通して自分を知り、個性を伸ばしていこう。</p>	
<p style="text-align: center;">エクササイズ</p> <p>2 「私の3つの心」の理解 エゴグラムにおける「私の3つの心」について理解する。</p> <p>3 エゴグラムから見る自己理解 グラフを見てどの部分が高く、どの部分が低いか、ワークシートに記入し、自分の性格の特徴を理解する。</p> <p>4 エゴグラムのパターンの説明 一般的に多いエゴグラムのパターンの説明を聞き自己理解の参考にする。</p> <p>5 自己理解の深化 ・自分のグラフやワークシートをもとに自分について深く考える。 ・ワークシートのまとめに記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T1 プリント資料を配布する。 ・T1 これがすべてではなく、自己理解のための、1つの手がかりであることを強調する。 ・T1 ワークシートに記入しやすくするためにプリント資料を参考にさせる。 ・T1 記入の仕方に迷う生徒に指示をするために教師、SCでグループを回り、質問に答える。 【評価 ワークシート】 ・T2 事前にクラス全員のエゴグラムを見て、多かったパターンを調べておく。 ・T2 グラフを理解するために性格特徴や行動のパターンについて具体例をあげ、説明をする。 ・T2 配慮の必要な生徒については打合せをしておく。 ・T2 自分はこんな人間なのだと思えたり、落ち込んだりする心配があるので、エゴグラムの結果は環境や立場によって変わり、自分の努力で変化するものであることを説明する。 ・T1 自分の傾向で大切にしたいこと、これから意識して変えていきたいことを中心にまとめさせる。 【評価 ワークシート】 ・T2 自分が知っている「自分」の姿はほんの一部であり、可能性をもった存在だということをも心の4つの窓を基にアドバイスする。
<p style="text-align: center;">シェアリング</p> <p>6 シェアリング(分かち合い) ・ワークシートをもとにグループの人と今の気持ちを話し合う。(グラフを見ての感想、気付き、友人の自己開示を聞いての感想等) ・シェアリングの内容を全体で発表する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T1 シェアリングの前に、グループ内で共通の感情や気付きを分かち合うことの大切さを伝える。 ・T1・T2 シェアリングの途中に、グループを回り、円滑なシェアリングを支援する。 ・T1 学級全体で共通の感情や気付きを分かち合うことの大切さを伝える。 【評価 観察】
<p style="text-align: center;">まとめ</p> <p>7 学習のまとめ 振り返りカードを利用し、今日の授業で新たに気付いたこと等をまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・T1 詳しくエゴグラムについて知りたい生徒に、個別の相談方法を紹介する。 ・T1 来月予定されている定期教育相談のことを伝える。 ・T1 SCからのアドバイスを記入後、返されたワークシートは記録として「心のノート」に貼っておくように伝える。 【評価 ワークシート】

準備物 筆記用具、資料プリント、ワークシート、振り返りカード

4 評価

キャリア発達にかかわる4つの能力	能力の説明	評価の観点
【人間関係形成能力】 自他の理解能力	自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力。	自己理解の視点や方法について理解を深めている。 他者からの意見を受け入れ、参考になっている。
【情報活用能力】 情報収集・探索能力	進路や職業に関する様々な情報を収集・探索するとともに、必要な情報を選択・活用し、自己の進路や生き方を考えていく能力。	別の視点から自己を分析しようとしている。

イ 授業の考察

(ア) 振り返りカードの結果分析

自分を知ることの大切さを理解し、自分を知ることについて興味をもった生徒が多いことが分かった。もともと「自分のよさや個性が分かっている」と感じている生徒が多いクラスであったが(図8)、この授業を通して新たな自分に気付くことができたと思えた生徒が約80%おり、生徒の自己理解が深まったと思われる。

SCとのかかわりについて、「専門家のアドバイスを受け、自分の性格を意識して変えてみたいところがあった」、「SCからまだ話を聞いてみたい」と答えた生徒がともに83.3%いた。実際に、授業直後に質問に来た男子生徒もあり、今後の相談活動を円滑に行う素地になったと考えられる(図9)。

(イ) 生徒の感想からの考察

振り返りカードの結果と同じように、生徒の感想(図10)からも生徒が、自己理解を深めている様子分かる(Aさん)。また、別の視点から自己を分析しようという意欲が読み取れる生徒もいた(Bさん)。進路指導部の実施したアンケートで「自分のよさや個性があまりわからない」と答えていた生徒が、授業後に、「新たな自分に気付くことができた」と答え、授業後、SCのキャリア・カウンセリングを希望した生徒もいた(Cさん)。また、グループによるキャリア・カウンセリングの機能の1つとして有効であるシェアリングの活動を通して、友人の自己開示を聞き、新たな視点から自問自答をしていくことで自己洞察を深めたことがうかがえる感想もあった(Dさん)。

(ウ) 学級担任・SCの感想からの考察

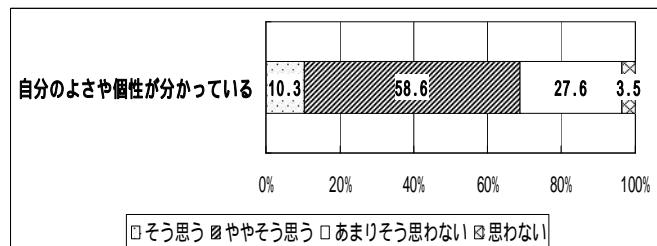


図8 原籍校進路指導部によるアンケートの結果 (一部抜粋)

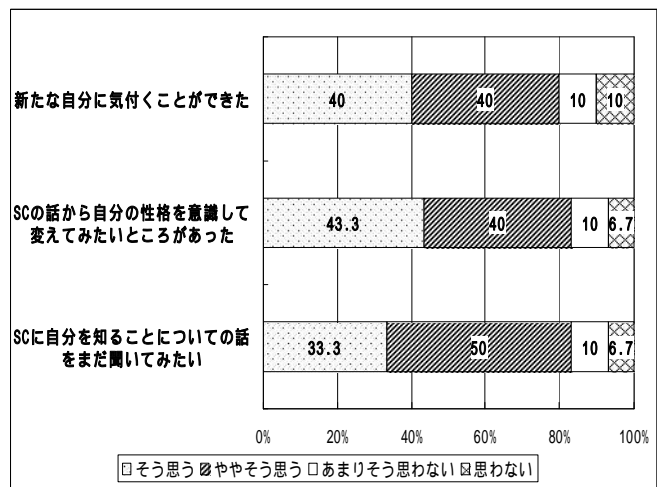


図9 振り返りカードの結果 (一部抜粋)

授業後、学級担任から、「日ごろから積極的な取組みが行われてきたクラスであるが、日ごろ以上の盛り上がりが見られ、今後の進路学習やキャリア・カウンセリングにつながる」という感想をもらった。SCの感想からは、「定例の教育相談において、振り返りカードではSCと話したいとはあまり思っていなかった生徒が、相談の第一希望にSCを指名していたのも、1つの収穫である。いずれにしても、この活動が楽しかったと答えてくれた生徒が96.7%もいてくれたことが成果であるように思う」とあり、両者の感想から、学級担任やSCとの授業後の相談活動が円滑になり、互いのよりよい信頼関係も育ちつつあると考える。

ウ 授業後のキャリア・カウンセリング

(ア) 振り返りカードの事後活用と考察

SCにとって、クラス全員への個人面接は、週1回の来校という時間制限のある中では難しい。そこで、授業後にSCと授業者で振り返りカードを読み、SCが一人ひとりにアドバイスを書いた(図11)。振り返りカードへのアドバイスを記入することで、授業の中で自分の特徴を偏って判断している生徒への視野を広げるための助言をすることができ、また、個々のケースに応じた自己理解を促すこともできた。授業後の気配りや励まし等、心理的なケアを丁寧に行うことも大切なことであることも改めて分かった。

(イ) 授業後の定期教育相談と考察

授業後、定期に実施される教育相談にSCとの個別キャリア・カウンセリングを希望した生徒が2人いた(図11のEさん・Fさん)。2人とも、授業の振り返りカードでは、「自分を変えてみたい」という質問項目や、「SCとのキャリア・カウンセリング」等

Aさん:「自分のことがよく分かる授業だった。自分のことだからすごく興味があって、すごく楽しかった。自分でも気付かない自分があって、それに今日は気付けたなと思った」

Bさん:「自分のことを少しは分かったつもりだったけど、これやって新たに自分のことが分かったのでよかったです。きっとまだ自分自身のこと分かっていないと思うから知ってみたいです」

Cさん:「授業が終わった後に、SCの先生に聞いたら、君はリーダーシップをとれる、まとめ役になれると言われてうれしかった」

Dさん:「もっと自分を知りたくなった。私はあまり人としゃべらない時がある。しゃべるのが苦手なのかもしれない。でも人の話をいろいろ聞いて同じような考えをもっている人がいるんだなと思った」

図10 生徒の感想

Eさん:「自分のことを知ることはとてもいいことだと思うけど無理に知る必要もないと思った」

SCからのアドバイス

「あなたの言うとおり、自分を無理に知る必要はないと思います。いろいろな体験を重ねていくうちに少しずつ自分を発見していくものかもしれません。けれど、時には今の自分を振り返ってみると、意外な自分を見つけることができるかも...そこには未知なる可能性が広がっています」

Fさん:「これからマイナス面のことはちょっとずつ変えようかなと思ったけど、それも自分らしさだからやめました」

SCからのアドバイス

「あなたは一見うさぎことを言われるのがきらいで、明るく楽しく思いどおりに振る舞っているように見られるかもしれませんが、何かをするときに決められずに迷ったり、悩んだりすることはありますか。自分の行動が良い結果になるか考えて行動するともっと自分に自信がもてると思いますよ」

図11 個別キャリア・カウンセリングを希望した生徒の感想と振り返りカードでのSCのアドバイス

の必要性について、否定的な考えをしていた。彼らが、個別のキャリア・カウンセリングを希望したことは、意外に思えた。しかし、SCとの個別のキャリア・カウンセリングを進めていく中で、Eさんは「友人関係がうまくいかないのはどうしてなんだろう」、Fさんは「今、将来の夢がないのはいけないことなの」という思いをもち始め、SCからのアドバイスによって気持ちの変化が表れたようである。2人に共通していることは、「今の自分がどうなのか」を自問自答していることである。さらに、Fさんは、将来の夢・希望についても考え始めている。これらは、Eさん、Fさんが「プロセス」そのものを経験しているよい例であるといえる。授業後に個別のキャリア・カウンセリングを受ける機会をつくることは、自己理解を深めるための支援として有効であることが分かった。中学校3年間の中で、少しでも多くの生徒にこのような変容が見られればよいと考える。

(3) キャリア教育指導計画への位置付け
授業実践の結果からも、SCと連携した授業をすることで、生徒の自己教育力が高まり、生徒のキャリア発達にかかわる諸能力が高まることが分かった。

また、授業を実践した結果、学級担任やSCとの個別のキャリア・カウンセリングを受けた生徒もあり、自己を見つめる機会をつくることができた。このような機会を3年間通じてつくっていくことは、生徒が自らの生き方を見つめるという意味からも必要である

と考える。そのためには、キャリア教育の年間指導計画が必要である。そして、その計画の中に、SCとの連携が必要な場面を位置付ける必要がある。年間指導計画の中に位置付けることで、他の領域との連携がとりやすくなり、3年間を通じてキャリア・カウンセリングを系統的に行うことができるのではないかと考える。

SCとの連携が効果的な場面としては、定期教育相談や進路相談、学習活動及び体験活動等がある。そして、それぞれの場面では、自己理解への支援が必要な場合、自己表現の支援が必要な場合、安心感回復の支援が必要な場合等が考えられる(図12)。さらに、SCとの具体的な連携の在り方については、授業への支援(チーム・ティーチング、資料提供等)、カウンセリング研修、定期教育相談への参加等が考えられる。

SCとの連携がどのような場合に効果的であるかを、カウンセリングの手法を生かした展開を考え、原籍校の年間指導計画を参考に作成した「キャリア教育年間全体計画」の中に当てはめてみた(図13)。固定的な1つの手法や取組みの姿勢、アプローチだけでなく、クラスの状況、対象となる生徒の発達段階や状態等により幅広い様々な取組みが考えられる。

ア 自己理解の支援が必要な場合

「構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた授業」

今回の授業実践でも実施したように、生徒自身が自分の性格の特徴や行動のパターン、自分の問題を発見するような場面において、構成的グループ・エンカウンターの手法を使った授業

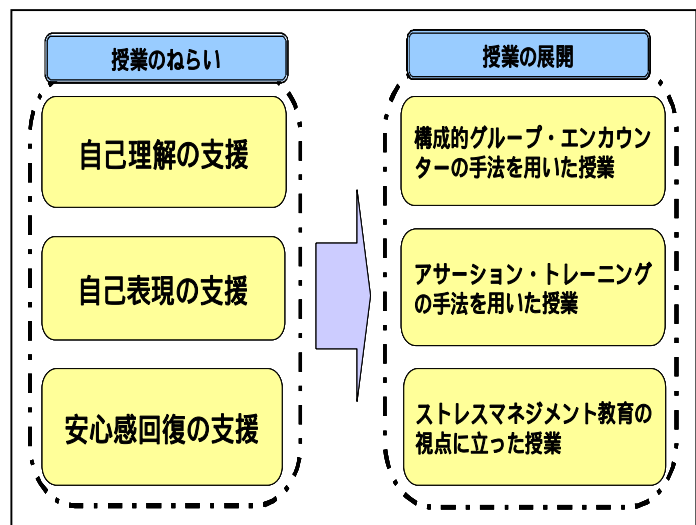


図12 SCとの連携が効果的な場合と授業

が考えられる。シェアリングの活動を通して、活動の中で生まれた不安、悩み、疑問を和らげ、新たな自分の発見や新たな行動を可能にすることができる。

イ 自己表現の支援が必要な場合

「アサーション・トレーニングの手法を用いた授業」

自他尊重の話し方について学習するアサーション・トレーニングの手法を、職場体験等の体験活動の事前学習として実施することが考えられる。

アサーション・トレーニングとは、よりよい人間関係づくりを目的とし、日常生活の具体的な場面を例にあげ、互いを大切にしながら自分の気持ちや考えをその場面にふさわしい方法で表現できるようにするための演習である。アサーション・トレーニングの手法を用いて、3つの表現方法(攻撃的な自己表現、非主張的な自己表現、自分も相手も大切にしたい自己表現)を体験させ、また実際にロールプレイを行うことで、表現のスキルの学習だけでなく、様々な役割を体験することによる認知の変容等の効果をねらうことができる。

ウ 安心感回復の支援が必要な場合

「ストレスマネジメント教育の視点に立った授業」

ストレスマネジメント教育とは、ストレスに対する自己管理を効果的に行えるようになることをめざした教育的方法であり、自分や他者の「安心感・安全感」をつちかう教育である。ストレスマネジメント教育の視点に立った授業を、第3学年の受験期のみで実施するだけでなく、第1学年の場合は入学直後や初めての試験前、第2学年は各学期の始めや新人戦等の部活動の試合の前等、各学年でストレスが高まる時期に実施すると効果が上がると考える。進路決定の時期に限らず、学校生活の中で、誰もが多少の不安や悩みをもっている。生徒たちの不安や悩みを少しでも解消し、支援することが必要である。ストレスと上手につきあっていくことを知ることは、将来、様々な問題に直面したとき、上手に乗り越える工夫を考え出すことにもつながると考える。

キャリア教育年間全体計画表		◎進路学習【人】人間関係形成能力【情】情報活用能力【将】将来設計能力【意】意思決定能力					
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
学校行事	始業式・入学式 春季予備・学級懇談会	PTA総会・春季県体 修学旅行・1、2年学年行事	市選手権・生徒総会 3年高校を知る会・期末テスト	クラスマッチ・保護者会 終業式	登校日 2年職場体験	始業式 体育祭	秋季県体・中間テスト 文化祭
学級活動 ◎は進路学習	1年	●学級の組織と自分の役割【意】 ●中学生活をはじめよう【人】 ◎中学校では何を学ぶのか【意】 ◎コミュニケーションを豊かに【人】	●生徒会での役割【将】 ●健康で安全な生活【情】 ◎選科教科ガイダンス【意・将】	●生徒総会に向けて【情・意】 ●学級の組織と自分の役割【意】 ●悩みや不安は誰にでもある【人】	●体育祭へ向けて【人・意】 ●1学期の反省【将】 ●長い夏休みに自分の力を伸ばす【人・意】	●2学期の生活目標【人】 ●充実した生活と学習【将】	●文化祭へ向けて【人・将】 ●交通安全【情】 ◎自分をみつめ、特色を知る(1)【人・情】
	2年	●学級の組織と自分の役割【意】 ●1年生の自分と2年生の自分【将・意】	●生徒会に向けて【情・意】 ●自分の学びを考えよう【将】 ◎職業について調べよう【情・将】	●生徒総会に向けて【情・意】 ●1学期の反省と夏休みの生活【将】 ◎職業について調べよう【情・将】	●体育祭へ向けて【人・意】 ●1学期の反省と夏休みの生活【将】 ◎生き方について考えよう【将・意】	●2学期の生活目標【人】 ●充実した生活と学習【将】	●文化祭へ向けて【人・将】 ◎卒業後に学ぶ道(1)【将・将】
	3年	●学級の組織と自分の役割【意】 ●1年間の見通しを持つ【人】	◎選科教科ガイダンス【将・意】 ◎進路を考えよう【情・将】 ◎キャリア・カウンセリングの受け方【情】	●生徒総会に向けて【情・意】 ●学習の問題点や悩みを解決【情・意】 ◎進路を考えよう(進路説明会)【将】	●体育祭へ向けて【人・意】 ●1学期の反省と夏休みの生活【将】 ◎生き方について考えよう【将・意】	●2学期の生活目標【人】 ●充実した生活と学習【将】	●文化祭へ向けて【人・将】 ◎卒業後に学ぶ道(1)【将・将】
総合的な学習	1年	「いじめ撲滅月間」実践・発表 「インターネットの活用」	「いじめ撲滅月間」実践・発表 「インターネットの活用」	課題解決学習の基礎 「インターネットの活用」	課題解決学習の基礎 「インターネットの活用」	課題解決学習の基礎 「インターネットの活用」	課題解決学習の基礎 「インターネットの活用」
	2年	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」
	3年	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」	「インターネット利用の約束」 「インターネット利用の約束」
道徳	1年	●先生の家はどこか(4-1集団生活の向上)【情】 ●魔法(2-2思いやり)【人】 ●魔法の呪文アタラクシア(4-2集団生活)	●人に迷惑をかけなければならないのか?(4-2後やまをまと)【情】 ●のっそり桜の引っ越し(4-2集団生活)	●家庭のででこと(1-3自主自立)【意】 ●木箱の中の鉛筆たち(1-2思いやり)【情】	●言ならでできる(1-2思いやり)【情】 ●生命の誕生ってすばらしい(3-2生命の尊厳)【意】	●朝の歩道で(4-3266)【情】 ●おぼれかけた兄弟(3-36)【情】 ●朝の足音(4-3266)【情】	●メダカと飛んだ天女(1-4想像の発展)【情】 ●思いやりを表現する(2-2思いやり)【人】

アサーション・トレーニングの手法を用いた授業

ストレスマネジメント教育の視点に立った授業

構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた授業

職場体験学習に向けて

図 13 S C と連携が効果的な授業の一例

3 まとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

本研究では、キャリア教育におけるキャリア・カウンセリングの在り方について3つの指導場面（定期的なキャリア・カウンセリング、学習活動と連携したキャリア・カウンセリング、体験活動をとらえたキャリア・カウンセリング）を整理し、その場面の中から学習活動と連携したキャリア・カウンセリングを取り上げ、特にSCとの連携を重視した授業を実践した。授業実践の結果から、生徒の自他の理解能力は高まり、新たな自分を見付けようという意欲、態度が育つということが分かった。そして、授業後、個別のキャリア・カウンセリングにもつながり、自己理解を更に深めることができることも分かった。

SCと教員が連携して授業を行うことにより、キャリア発達において生徒への指導・援助を専門性の高い助言を得ながら進めることが可能になり、生徒たちの意識も高まった。指導に当たって、SCと教員とが役割分担について話し合い、SCの専門性と教員の専門性の両方を生かした授業は、有意義であったといえる。

(2) 今後の課題

キャリア・カウンセリングについては、これまでも学校現場において実践してきたことである。しかしながら、「プロセス」を意識し、また、総合的、系統的に計画を立てて実践するまでには至っていなかった。

今後は、まず、これまで多くの学校で行ってきている定期の教育相談以外での場面で、キャリア・カウンセリングを継続的に行えるように、教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動の指導内容とキャリア・カウンセリングを関連付け、学校独自のプログラムを作成する必要があると考える。そのためには、教育活動全体をキャリア教育の立場から4つの能力（キャリア発達にかかわる諸能力）を育成する視点で見直し、具体的な実践方法について検討していく必要がある。そして、総合的に検討したものをプログラムの中に組み込んでいくことで系統立てたキャリア・カウンセリングが実践できると考える。

さらに、キャリア・カウンセリングは「プロセス」を重視した相談であり、生徒に自らの生き方を真剣に考えさせる問いを教員がどのように投げ掛けていくかが重要となってくる。よって、SCのもつ専門性を活用して、教員が教育相談的なアプローチの方法や技能を修得していくことも大きな課題である。

以上のことから、総合的、系統的なキャリア教育の実践を目指して、SCと連携したキャリア・カウンセリングの充実を図っていきたい（図14）。

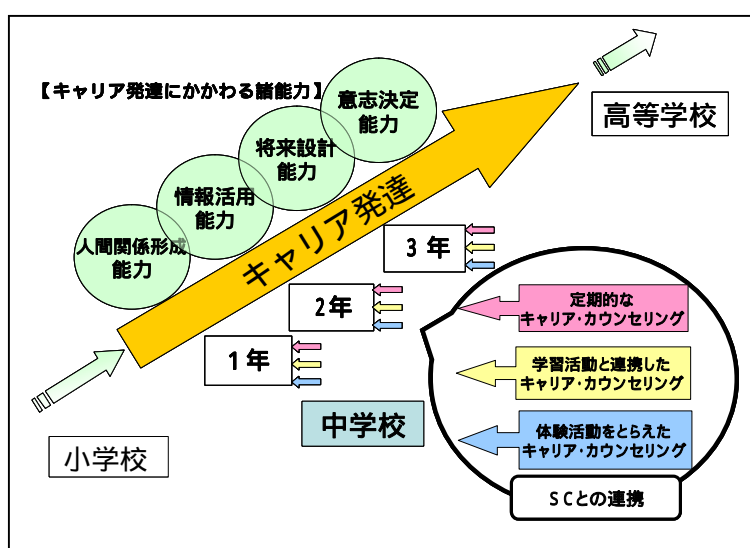


図14 継続的なキャリア・カウンセリング

【引用文献】

- (注1) 山口県教育委員会 『キャリア教育の推進について～児童生徒一人ひとりの夢の実現に向けて～』 山口県教育委員会 2005 参考資料
- (注2) 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』 文部科学省 2004 P10
- (注3) 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』 資料 文部科学省 2004 P51
- (注4) 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』 文部科学省 2004 P7
- (注5) 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒の一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』 文部科学省 2004 P29
- (注6) 山口県教育委員会 『キャリア教育の推進について～児童生徒一人ひとりの夢の実現に向けて～』 山口県教育委員会 2005 P11

【参考文献】

- 國分康孝監修 『エンカウンターで学級が変わる中学校編 Part 1』 図書文化社 1996
- 三村隆男 『キャリア教育入門 その理論と実践のために』 実業之日本社 2004
- 三村隆男 『学校進路指導における進路相談大学における進路指導授業から見えるもの』 「進路指導」第72巻 第2号 2002
- 宮城まり子 『キャリアカウンセリングはどのように活用するのか』 「日本労働研究雑誌4月号」 労働政策研究・研修機構 2004
- 日本進路指導学会 『キャリアカウンセリング その基礎と技法、実際』 実務教育出版 1996
- 仙崎武監修 進路力を育てるネットワーク編著 『中学生の進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン』 実業之日本社 2001
- 田中秀利 『初等・中等教育と高等教育との接続』 平成17年度キャリア教育を推進するための指導者の養成を目的とした研修講座 2005
- 館内俊・佐々木利佳子・手塚研一 『児童生徒の自己決定力をはぐくむ進路指導の確立 - キャリア発達課題の達成を確実にする系統的・横断的な支援システムの構築を通して - 』 宮城県教育研修センター 2004
- 富永良喜・山中寛 『動作とイメージによるストレスマネジメント教育 展開編』 北大路書房 1999
- 渡辺三枝子 『なぜキャリア教育が求められるのか』 「教職研修」10月号 教育開発研究所 2003
- 吉田辰雄 『キャリア教育論 進路指導からキャリア教育へ』 文憲堂 2005